

平成28年度 学校評価総括評価表

徳島県立徳島視覚支援学校

(1) 重点課題

視覚支援学校と聴覚支援学校が、「つながる」を合い言葉として連携・協働することにより、「幼児・児童生徒の夢と希望につながる保育・教育」を推進する。

1 学びがにつながる

視覚支援学校と聴覚支援学校で学ぶ幼児・児童生徒が、互いに認め合い、ともに高め合う保育・教育を推進することにより、豊かな心を育む。

2 未来につながる

幼稚部から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。

3 地域とつながる

特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある乳幼児から児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をとおした活動を支援します。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守ります。

4 心がつながる

思いやりと支え合いの心に満ちた人間性豊かな社会を築くため、学校と保護者、地域、関係機関・団体等が連携し、視覚障がいに関する理解の推進に努める。

(2) 重点目標

- ① 視覚障がい教育に関する研修と公開授業、OJTによる授業力の向上等により、教職員の専門性を向上します。
- ② 点字教材と触察教材の充実を図ることにより、一人一人の見え方に対応した教育を推進します。
- ③ 支援機器等教材を積極的に活用することにより、指導方法の充実を図ります。
- ④ 特別支援教育センターとしての機能を十分に発揮し、視覚障がい等のある乳幼児から児童生徒に対する専門的な支援を全県展開します。
- ⑤ 幼児・児童生徒一人一人の人権を最大限に尊重するとともに、全教職員がいじめのない学校づくりに努めます。
- ⑥ 幼児・児童生徒の発達段階をふまえたキャリア教育の推進を図ります。
- ⑦ 視覚支援学校と聴覚支援学校の幼児・児童生徒および教職員が、安心・安全な学校生活を送るための環境設定やルールづくりを推進します。
- ⑧ 聴覚支援学校との共同学習や行事への参加等により、ともに学ぶ教育の構築に向けた取り組みを推進します。
- ⑨ 教員と寄宿舎指導員による就業体験の引率をとおして、寄宿舎における生活指導の充実を図ります。
- ⑩ 防災避難施設として、地域の人々と連携した防災訓練等を行います。
- ⑪ 生涯学習の拠点として、視覚障がいのある人の活動を支援します。
- ⑫ 奉仕活動や環境・エネルギー活動、啓発活動をとおして、地域とのつながりを深めるとともに、視覚障がいに対する理解の推進を図ります。

重点課題	①学びがつながる				
	視覚支援学校と聴覚支援学校で学ぶ幼児・児童生徒が、互いに認め合い、ともに高め合う保育・教育を推進することにより、豊かな心を育む。				
重点目標	⑦視覚支援学校と聴覚支援学校の幼児・児童生徒および教職員が、安心・安全な学校生活を送るための環境設定やルールづくりを推進します。				
			評価	学校関係者評価	
	具体的な活動計画	評価指標	評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	学校関係者の意見 次年度への課題と 今後の改善方策
寄宿舎	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚支援学校と連携を図り、火災・地震・不審者対応の合同避難訓練を行ったり、防災に関する理解を深めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・火災・地震・不審者対応の合同避難訓練を、年間各1回実施する。 ・非常食の種類や作り方等を学び、試食する。 ・防災士を招き、防災研修を年間1回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地震・津波、不審者対応、火災の合同避難訓練を各1回実施した。訓練前後に学習を行い、反省や改善点などを挙げ、夜間に安全に避難できるよう柱や車止めに光反射シールを貼ったりセンサーライトを増設したりするなどの改善をすることができた。特に不審者対応訓練では警察の協力の下、舎生も含めた訓練を行うことができた。また、安全対策強化のため、さすまた等の補充を行うことができた。 ・避難訓練の学習の一環として、非常食を作り、試食することができた。 ・夏季休業中、防災士による防災上の基本的な知識についての職員研修を合同で行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・施設設備について、避難訓練を行って気づいた点をすぐに改善できており、先生方の努力に感じ入った。 ・警察に来てもらって不審者対応訓練を行っていたが、県内の施設の動向は、監視カメラを一定期間録画して対策をしている。(監視カメラは寄宿舎と校舎に設置して職員室から見るができる。録画できているか確認。) <ul style="list-style-type: none"> ・聴覚支援学校と連携をはかり互いの障がいについての理解を深め、舎生一人一人の見え方や聞こえ方に配慮した避難方法を考える。舎生自らが安全に避難できるよう、避難経路や避難場所の見直しをはかる。不審者対応訓練については、次年度も舎生を含めた内容で計画をする。

<p>渉外・安全課</p>	<p>・幼児・児童生徒・教職員が安全に学校生活を送るために、校舎内外の施設設備の点検を行う。</p>	<p>・渉外・安全課員が担当を決めて、月に1回以上校舎内外を見回り、課会で状況を報告する。</p>	<p>・各階ごとの環境整備チェックリストを作成し、月末に課員が見回った。課会で、チェックリストを提出し、近況を報告することができた。</p> <p>・トイレやふれあいコーナーのマットについては、学校支援チームの教員の意見で、必要な箇所を検討したり、材質を変えたりした。また、緊急対応訓練の後、職員室内の表示や、各教室の記録用紙について、改善をはかることができた。</p>	<p>A</p>	<p>・校内の設備の点検について、文章として出ていないだけで生徒に普段から聞き取っていると思うが、今後の改善方策として、教職員から要望を聞き取るだけでなく、生徒も含め、生徒を中心にしてほしい。生徒から意見を引き出し、困っていることを訴えることができる力を育ててほしい。</p>	<p>・今年度は、課員が環境のチェックを行うのが主であった。次年度は、環境改善に関して、教職員からの要望を聞き取ることができるシステム作りが課題である。</p>
---------------	--	---	---	----------	--	--

重点課題	①学びがつながる				
重点目標	視覚支援学校と聴覚支援学校で学ぶ幼児・児童生徒が、互いに認め合い、ともに高め合う保育・教育を推進することにより、豊かな心を育む。				
重点目標	⑧聴覚支援学校との共同学習や行事への参加等により、ともに学ぶ教育の構築に向けた取り組みを推進します。				
			評価		学校関係者評価
			評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	学校関係者の意見
	具体的な活動計画	評価指標			次年度への課題と 今後の改善方策
幼稚園部	・幼児の実態に合わせて、聴覚支援学校の幼稚部の幼児とかかわり合う保育活動を実施する。	・幼児の実態に応じて、一緒に給食を食べたり、自由遊びで同じ場所で遊んだりする。 ・自由遊びでの自然なかかわりを含め、季節の行事や日々の保育活動等での意図的なかわりを年間10回以上実施する。	・幼児1名が、一緒に給食を食べ、近くの席の友だちを意識して関わる様子が見られた。自由遊びでは、数回園庭に行き、同じ場所で遊んだ。 ・ふれあいコーナーの五月人形やクリスマスツリー、ひな人形の飾り付け、いもの苗植え、いもほり、焼きいも、水遊び、お店屋さんごっこ等を12回実施した。	A	・次年度は両校の人数の差が今年度よりも大きくなるため、同じ学年同士の交流を中心にかかわり合う保育活動を実施していきたい。 ・幼児の実態が違い、幼児同士のかかわりが難しい面があるが、視覚支援学校の幼児の名前を覚えて声をかけてくる聴覚支援学校の幼児もいた。次年度も幼児や教員の写真と名前を交換し、幼児が意識できるようにすると共に、教員がお互いの幼児の名前を覚え、積極的に関わり、幼児同士のかかわりの橋渡しになるようにしていく必要がある。 ・学部だより等の交換や保育参観を実施することで、視覚支援学校の行事やあそび、聴覚支援学校幼稚部の幼児へのかかわり方や交流保育の参考になったので、次年度も継続して行いたい。
	・互いの保育のねらい等を知り、聴覚支援学校の保育の参観をする。	・保育に関する情報や計画、学部だより等を交換したり、教材の共有をしたりする。 ・幼稚部教員が、聴覚支援学校の保育を年間1回以上参観し、気づきや質問を共有する。	・学部だよりや保育計画、幼児や教員の顔写真と名前等を交換したり、文化祭の光教材や衣装を共有したりした。 ・聴覚支援学校の幼稚部が公開授業の時やオープンスクール期間中等に幼稚部教員全員が1～2回参観をした。気づきや質問を紙面で交換して共有をし、3学期末に話し合いを行った。		

<p>小学部</p>	<p>・聴覚支援学校小学部との親交や相互理解を深めるため、交流及び共同学習を実施する。</p>	<p>・年間6回以上の学年交流や共同学習、聴覚支援学校の行事への参加等を行う。 ・聴覚支援学校の授業参観を年間1回行う。 ・担任児童の交流の事前指導や交流時の支援方法に生かすために、障がい種の異なる児童への指導方法や配慮事項を把握する。</p>	<p>・各学年の交流給食を計9回行った。また、10月に文化祭に参加、11月に学部間交流を1回行った。交流を通して、本校児童は聴覚支援学校の児童に刺激を受けたり、意識したりしながら活動に参加することができた。 ・年間1回以上の授業参観については、約90%の達成率であった。 ・交流前の児童への配慮事項などの共通理解については、適切な時期に十分な話し合いができなかった。</p>	<p>B</p>		<p>・交流回数については今年度同様程度行う。 ・交流給食については、来年度本校に4・6年生が在籍しないが、聴覚支援学校の児童が他学年の交流に参加してもらうことで、全学年の児童と交流ができるようにする。 ・4月に両校の児童教員の顔合わせを行う。また両校の担任が1学期中に障がい種の異なる児童への配慮事項等を把握する時間を設け、両校の児童理解に努める。</p>
<p>中学部</p>	<p>・聴覚支援学校中学部の生徒と、交流及び共同学習を通して、ともに協力して活動する。</p>	<p>・教科での合同授業や給食交流、点字ブロックの日等の啓発活動等の活動を、年間3回実施する。</p>	<p>・1学期には対面式で自己紹介を行い、互いにどうすれば伝わるかを考えるきっかけとなった。第2学年は理科の合同授業を2回実施し、動物の剥製等を観察し、気づきを伝え合った。「点字ブロックの日」啓発活動に関する取組では、点字ブロックの大切さを学び合い、協力して作業を行う等し、年間6回共同学習を実施した。 また、教員研修を実施し、互いの障がいについての合理的配慮を確認し合うことができた。</p>	<p>A</p>		<p>・教科についての合同授業は、学習内容の進度や実態に応じて、教員間で情報交換をしながら計画する必要がある。また、教員間で、生徒について情報交換を行ったり障がいに応じた手立てや配慮の違いを学び合ったりすることは、互いの障がい理解のためにも有効であったため、次年度も取り組みたい。</p>

<p>高等部 普通科</p>	<p>・両校生徒が互いを理解し合うために見えにくさ、聞こえにくさについて、また交通安全に関することについての発表や意見交換を行う共同学習を実施する。</p>	<p>・年間2回実施し、互いの発表や意見を聞き、気がついたことや感想をまとめ発表し合うことができる。</p>	<p>・地域との防災学習と、「点字ブロックの日」理解啓発活動の事前学習を通して、意見交換や発表を行った。防災学習では、グループ内でクロスロードを行い、一人ずつ自分の考えを発表した。「点字ブロックの日」理解啓発活動の事前学習では、パワーポイントやパネルを活用し聴覚支援学校の生徒たちに配慮した発表をすることができた。</p>	<p>A</p>		<p>・次年度も継続して清掃活動や「点字ブロックの日」理解啓発などの合同学習を行うとともに、発表や話し合いを取り入れた合同学習を計画し、コミュニケーション能力の向上を図り、生徒同士の活発な意見交換をめざしたい。</p>
<p>生徒活動課</p>	<p>・学校行事等について、聴覚支援学校との交流が進むよう計画を立て、ともに学ぶ教育の機会を設ける。</p>	<p>・第42回中国四国地区盲学校弁論大会校内選考会、文化祭、などの学校行事等において、聴覚支援学校と年2回以上の交流が実施できるよう計画する。</p>	<p>・5月11日に、第42回中国四国地区盲学校弁論大会校内選考会を実施し、聴覚支援学校の中学部・高等部の生徒を招き、交流することができた。文化祭は聴覚支援学校が10月16日、視覚支援学校が11月12日に実施した。お互いに文化祭に参加し、表現の部や展示の鑑賞、バザー等を通じて交流することができた。学校行事等において、聴覚支援学校と年2回以上の交流が実現した。</p>	<p>A</p>		<p>・交流及び共同学習により聴覚支援学校との連携を深めることができたので、来年度も引き続き連携を途切れさせることなく、共同学習や各行事で交流の場を設け、ともに学ぶ教育を実現したい。</p>

重点課題	②未来につながる 幼稚園から小学部, 中学部, 高等部, 高等部専攻科における, 専門性の高い一貫した保育・教育により, 社会に主体的に参加し, 自立をめざす人を育てる。					
重点目標	① 視覚障がい教育に関する研修と公開授業, OJTによる授業力の向上等により, 教職員の専門性を向上します。					
	具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
			評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)		
教務課	・幼児・児童生徒の学力向上, 教職員の授業力(専門性)向上のため, 公開・研究授業について職員朝礼で校内広報する。多数の教員が参観できるよう時間割調整を行うことで, 教職員の専門性向上の一助となるようにする。	・参観計画が立てられるよう職員朝礼で公開・研究授業の予定を広報したり, 時間割変更を行ったりし, 90%以上の教員から「2回以上の授業参観ができた」という回答を得る。	・研究授業や公開授業の日程が決まるごとに, 職員朝礼にて広報し, 授業参観するにあたり時間割の変更が必要な教員は教務課へ申し出てもらうように取り組んだ。 ・全教職員に調査を行ったところ, 計画的に参観をしており, 「2回以上, 計画的に見学できた」との回答が得られた。100%の目標を達成できた。	A		・引き続き研究・情報課との連携を図り, 公開・研究授業が有効な研修になるように多くの教員が参観できるよう調整を行っていきたい。

<p>研究・情報課</p>	<p>・わかる授業をめざして視覚障がい教育の専門性に根ざした授業実践を行うため、指導方法や実践事例を幅広く共有することを目的として、グループ研修を年間7回以上実施する。</p>	<p>・点字・歩行・教材研究・ICTのうち、所属するグループの研修内容に関する専門性が向上したかどうかのアンケートを実施し、80%の教員から「向上した」との回答を得る。</p>	<p>・所属グループの希望調査を実施し、全教員が4つのグループのいずれかに所属した。各グループで研修の年間計画を作成し、研修内容、担当者を決め、9回研修を実施した。各グループでは実践事例や教材教具、指導方法等について学部を超えた情報共有と意見交換が行われた。今年度は研修後のアンケートに「研修内容を授業に役立てることができるか」という項目を追加したところ、94.6%の教員が授業に役立てることができると回答し、視覚障がい教育に関する専門性向上につながった。</p>	<p>A</p>		<p>・教員の希望に添って、全グループとも複数学部の教員で構成して学部間の情報共有と活発な意見交換を図ることができるようにする。 ・グループ研修が、視覚障がい教育の専門性と指導力向上に重要な位置づけであることを踏まえ、次年度も計画通りに研修を実施したい。</p>
---------------	--	--	--	----------	--	--

重点課題	②未来につながる 幼稚部から小学部, 中学部, 高等部, 高等部専攻科における, 専門性の高い一貫した保育・教育により, 社会に主体的に参加し, 自立をめざす人を育てる。					
重点目標	②点字教材と触察教材の充実を図ることにより, 一人一人の見え方に対応した教育を推進します。					
	具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
			評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)		
中学部	・生徒の実態や学習内容に応じた点字教材や立体教材, 半立体教材を作成し, 授業に活かす。	・「点字等教材作成」担当教員との共同制作も含め, 年間15個教材を作成する。 ・教材を使用した後, 「自作教材シート」にまとめる。	・テスト問題は, 教材作成担当教員のアドバイスを受けながら, それぞれの教員が点訳を行った。また, 火鉢や灰, 野菜, 草花等の実物を用いるとともに, 社会では3個, 数学では11個, 理科では10個, 国語では3個, 美術では16個, 自立活動では2個, 合計45個の自作教材を作成し, 授業で活用した。また, 自作教材シートにまとめ, イントラに保管した。	A		・今後も, 教材作成シートやテストの点訳問題をイントラに保管することによって, 点字使用生徒への指導記録を学校全体の情報として残していきたい。

重点課題	②未来につながる 幼稚部から小学部, 中学部, 高等部, 高等部専攻科における, 専門性の高い一貫した保育・教育により, 社会に主体的に参加し, 自立をめざす人を育てる。					
重点目標	③支援機器等教材を積極的に活用することにより, 指導方法の充実を図ります。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
高等部職業学科	・生徒一人一人の視力の状態に適した環境で学習をすすめるため, 必要に応じて積極的にICTを活用した授業を実践する。	・ICTを活用した生徒へのアンケートで, 75%以上の生徒が学習しやすかったと評価する。	・ICTを活用した生徒へアンケートを取った結果, 全員の生徒が学習しやすかったという意見だった。また, 活用を促してきた結果, 見えにくい場合, 自分でICTを活用して解決する能力が育った。	A	・ICTを活用して自分で解決する能力が育ったとあるが, どのような工夫をされたのか。そのような力を育むことは素晴らしい。幼稚部から高等部の専攻科まで含めてどの段階でどのようにして自己解決をしていく力をつける工夫をされているか。 ・合理的配慮についての研修で講演をされた坂井先生はICTの普及についても全国的に詳しい方なのでいろいろな情報を取得されていると感じた。	・生徒の見え方は常に一定ではないため, 次年度も新入生を含め, 生徒のその時々の実態に応じたICTの活用を行っていきたいと考える。

研究・情報課	<ul style="list-style-type: none"> ・支援機器等教材を効果的に活用した指導方法の充実をめざし、支援機器等教材を活用した公開・研究授業を延べ4回以上計画・実施するよう呼びかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全公開・研究授業のうち4授業以上で支援機器等教材を活用した指導案が提示される。 ・公開・研究授業を80%の教員が参観し、コメントシートに支援機器等教材の活用について意見交換を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公開・研究授業の実施者と実施時期の年間計画を作成した。 ・研究授業が5回、公開授業が7回実施され、その内支援機器等教材を活用した研究授業が4回、公開授業が4回実施された。 ・全教員が公開・研究授業を参観し意見交換を行った。 	A		<ul style="list-style-type: none"> ・ICTサポーターによる技術的支援が得られない中ではあったが、各教員が工夫して支援機器等を活用した公開・研究授業を実施することができた。次年度は各教員にiPadが貸与されるため、技術的支援の必要性が増すことから、総合教育センターとの連携が必要である。
--------	--	--	--	---	--	---

重点課題	②未来につながる 幼稚部から小学部、中学部、高等部、高等部専攻科における、専門性の高い一貫した保育・教育により、社会に主体的に参加し、自立をめざす人を育てる。					
重点目標	⑥幼児・児童生徒の発達段階をふまえたキャリア教育の推進を図ります。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
高等部職業学科	・職業人として必要なスキルを身につけられるよう、治療院や病院でのキャリア実習を計画・実践する。	・職業学科「個別のキャリア教育学習プログラム」を活用し、1学期に職業人として必要なスキルについて教員が評価する。2学期の実習後に再評価し、すべての生徒の評価が上昇する。	・すべての生徒の評価が上昇とらなかった。10項目ある評価項目を平均すると、上がった生徒が50%、変化がなかった生徒は25%、下がった生徒が25%だった。トータルで見ると上記の結果であるが、詳細を見ると全ての生徒で項目によって上下があった。指導を重ねるにつれて、生徒の実態がより把握され、指導内容が増えてきたため、評価を下げざるを得なかったケースが多く見られた。	B	・社会で自立できる生活力を持って卒業することが課題。マッサージ等障がいのない方が進出している。ここで卒業した人が、やっていけるのか心配になった。社会で応援していかねければと思った。 (晴眼の方で鍼灸師の免許を持っている人が増えているが、本校では人数が少ないこともあり、そのことで進路先は狭まってはいない。高齢化でニーズは増えており、国家試験に合格すれば求人はある。卒業したときにしっかりと技術と知識を持って晴眼者と一緒になってもいけるように力をつけるようにしている。)	・評価が下がった生徒だけでなく、上がった生徒に対しても、より医療人としてふさわしいキャリアスキルを身につけさせるため、次年度以降も本校が作成した「個別のキャリア教育学習プログラム」を活用して、医療従事者として必要なキャリア指導を行っていきたいと考える。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">人権・キャリア教育課</p>	<p>・幼稚部から高等部におけるキャリア教育年間計画を教職員の共通理解のもとに作成・推進し、勤労観や職業観を育み、本人や保護者の希望がかなえられる進路実現をめざす。</p>	<p>・幼稚部・小学部は、勤労観の育成のため、家庭の協力を得て、チャレンジウィークが実施できるよう方法を確認する。90%以上の実施率を得る。</p> <p>・中学部は、進路希望調査の実施と併せて、生徒全員が仕事調べや職場見学を行う。</p> <p>・普通科は、一人1回以上の事業所見学か就業体験を実施する。</p> <p>・専攻科は、1年生は校内実習見学、2年生は治療院見学、3年生は治療院見学(実習を含む)を実施する。事後、生徒にアンケートを実行し、満足度80%以上を得る。</p>	<p>・実施記録が提出されていない家庭があったが、実施記録の提出や保護者への聞き取りにより、90%以上の実施が確認された。</p> <p>・夏季休業中に進路希望調査を実施した。生徒それぞれが関心をもつ職種について調べた。近隣の店舗で職場見学を実施することができた。</p> <p>・4名の生徒のうち、現時点で2名の生徒が就業体験を実施した。3年生の1名は就業体験を取りやめ受検に備えた。1名は、3学期に事業所見学を実施した。</p> <p>・1年生の校内実習見学、2年生の治療院見学、3年生の治療院見学(実習を含む)は、それぞれアンケートにより100%の満足度を得た。</p>	<p style="text-align: center;">A</p>	<p>・チャレンジウィークは取組を記録し、年ごとの目標や成長を確認できるようにしているが、記録未提出の家庭があった。今以上にキャリア教育の意義や必要性を家庭と共有するため、学級担任からの説明を重ねたり、通信に掲載したりして共通理解を図る。</p> <p>・中学部では、進路希望調査や職場見学などに今年度から取り組み始めた。より具体的な勤労観や職業観を育むために、就業体験に向け、計画・実施をする。</p> <p>・就業体験の位置づけについて保護者の理解を促し、将来の進路選択につながるような事業所見学や就業体験を継続して実施する。</p> <p>・県内事業所における見学先の拡大を行い、生徒への提供情報の充実をはかり卒業後の選択肢の幅を広げる。</p> <p>・普通科の報告会には中学部の生徒が、専攻科の報告会には普通科の生徒が参加することにより、卒業後を見通した進路への意識づけを図っている。今後も継続して実施したい。</p>
---	--	--	--	--------------------------------------	--

重点課題	②未来につながる 幼稚部から小学部, 中学部, 高等部, 高等部専攻科における, 専門性の高い一貫した保育・教育により, 社会に主体的に参加し, 自立をめざす人を育てる。				
重点目標	⑨教員と寄宿舎指導員による就業体験の引率をとおして, 寄宿舎における生活指導の充実を図ります。				
	具体的な活動計画	評価指標	評価 評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
寄宿舎	<ul style="list-style-type: none"> 学校と連携した就業体験の引率をとおして, 舎生の実態を把握し, 一人一人に応じた生活指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 就業体験の引率の前後には, 学級担任と各1回以上の情報交換を行い, 共通理解を図る。 就業体験後は, 共通理解した内容を, 寄宿舎指導員全体で話し合い, 生活面での課題を見つけ支援につなげる。 舎生の実態に応じて, 年間1回以上自立支援室を利用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 普通科2, 3年生各1名の就業体験の引率と, 専攻科3年生2名の校外臨床実習の引率を行った。引率の前後は, 学級担任や担当教員と情報交換を複数回行い, 実態や課題の把握に努めることができた。 就業体験後, 共通理解した内容を, 寄宿舎指導員全体で話し合い, 寄宿舎での生活指導に役立てることができた。 自立支援室の利用については, 卒業生を中心に, 3名の舎生が利用を行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 就業体験の引率は, 学校と連携して計画を立てる。就業体験後は, 本人・保護者・学校と相談し, 生活面での課題に取り組みたい。 自立支援室の利用については, 舎生・保護者に早期に打診し, 年間をとおして舎生の実態に応じた計画的な活用を考える。

重点課題	③地域とつながる 特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある幼児・児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をととした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。				
重点目標	④特別支援教育センターとしての機能を十分に発揮し、視覚障がい等のある乳幼児から児童生徒に対する専門的な支援を全県展開します。				
	具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価 学校関係者の意見
			評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	
サポート課	<ul style="list-style-type: none"> ・教育、医療、保健福祉、療育等の各機関との連携を密にし、教育相談や通級指導教室のニーズを掘り起こす。 ・地域の学校において行われる、視覚障がい児の教育や視覚障がい理解に関する学習を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員研修の機会に5回以上チラシの配布を行う。 ・県内全域の新生児科や小児科のある病院、保健師所属部署、療育機関等を30カ所以上訪問して、本校のセンター的機能について説明する。 ・地域の教員に向けての視覚障がい教育や視覚障がい理解啓発に関する研修を4回以上行う。 ・視覚障がい理解に関する学習の支援を5回以上行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーター研修や特別支援学級研修、本校主催の地域研修会等で8回チラシの配布を行った。 ・健診の支援に出向いた際に8カ所の保健師にチラシを配布した。相談・療育機関は12カ所、小児科及び眼科は10カ所を訪問し、チラシを配布した。 ・地域研修会を7回実施した。 ・視覚障がい理解に関する学習の支援を6回、実施した。また、サポート課員による小中学校での講演を13回実施した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・療育機関訪問の際に、視力評価が十分に実施できていないという話を聞いたので、次年度は療育機関等において、障がいのある幼児の視力の評価の支援に入ることができるよう、連携をとる。 ・2学期に小学4年生の国語科で点字について学習するため、学習への支援の依頼は2学期に集中するが、1学期に行うことにより夏季休業中に予定している地域への啓発行事や文化祭への参加を促すことができ、一層の効果が得られると考えられるため、近隣の学校には時期の変更について話し合いを持つ。

重点課題	③地域とつながる 特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある幼児・児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をとおした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。					
重点目標	⑩防災避難施設として、地域の人々と連携した防災訓練等を行います。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
渉外・安全課	・地域の防災避難施設としての役割を果たすため、地域住民や聴覚支援学校と連携した防災訓練を行う。	・地域の自主防災組織の担当者と計画を立て、防災訓練を実施する。 ・地域住民や各校の幼児・児童生徒が主体的に取り組めるゲーム等を行う。 ・中・高等部の半数以上の生徒が参加する。	・防災センター、地域の自主防災組織の担当者と話し合いを持ち、クロスロードを主とする防災訓練を8月29日に予定していたが、悪天候のため、実施できなかった。再度検討し、1月20日に、クロスロードと煙体験の防災学習を行った。中学部と高等部普通科の生徒7名中6名が参加した。	A		・地域の防災避難施設としての役割を果たすため、地域住民と聴覚支援学校と連携した防災訓練を、今後も継続していくことが必要である。そのためには、今までの実績をもとに、参加学部や内容、予備日を含めて時期の検討を行い、見通しを持った計画を立てることが課題である。

重点課題	③地域とつながる 特別支援教育センターとして、視覚障がい等のある幼児・児童生徒に対する専門的な支援を全県展開するとともに、障がいのある方の交流拠点として、生涯をとおした活動を支援する。また、防災避難施設として地域の方々の安全を守る。					
重点目標	⑪生涯学習の拠点として、視覚障がいのある人の活動を支援します。					
具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価	次年度への課題と今後の改善方策	
		評価指標による達成度及び活動計画の実施状況	総合評価(評定)	学校関係者の意見		
教務課	・視覚障がいのある人の学習の場である本校の教育活動の理解啓発を目的に行うオープンスクールについて、より広く広報をする。	・オープンスクールに関する広報箇所を新規開拓し、5カ所以上増やす。	・特別支援コーディネータ研修会及び弱視学級担任者研修会、徳島ロービジョンネットワーク定例会、県内の大学の6カ所で、今年度新たにオープンスクールの広報をおこなった。	A		・次年度も新たにオープンスクールの広報箇所を増やし、視覚障がいのある人の学習の場である本校の教育活動の啓発を継続する。

重点課題	④心がつながる 思いやりと支え合いの心に満ちた人間性豊かな社会を築くため、学校と保護者、地域、関係機関・団体等が連携し、視覚障がいに関する理解の推進に努める。					
重点目標	⑤幼児・児童生徒一人一人の人権を最大限に尊重するとともに、全教職員がいじめのない学校づくりに努めます。					
	具体的な活動計画	評価指標	評価		学校関係者評価 学校関係者の意見	次年度への課題と 今後の改善方策
			評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)		
生徒活動課	・いじめのない学校づくりに向け、外部から講師を招聘し、全教職員を対象としていじめ防止の研修を実施する。	・実施後のアンケートにおいて、教職員の「いじめ防止の意識が向上した」という回答を70%以上得る。	・実施後のアンケートにおいて、教職員の「いじめ防止の意識が向上した」という回答を90%得ることができた。	A		・引き続き、いじめのない学校づくりをめざし、研修や啓発、発生防止に努めるとともに、万一発生の場合には速やかに対応し、再発の防止策を全員で考え実践する。
	・全教職員でいじめ防止に取り組むとともに、いじめの事案の発生については、早期発見と早期対応を行う。	・いじめの事案の発生をとらえたときには、できるだけ早く事態を把握するとともに、生徒指導委員会等を通して解決に努める。	・今年度1月20日現在のところ、いじめの事案は発生していないが、引き続き、いじめのない学校づくりに努めたい。			
	・いじめや犯罪に巻き込まれないために、在学中のみならず、卒業後も役に立つ知識が身につくよう、専門家を招き、各安全教室を3回開催する。	・外部講師を招いて、携帯スマホ安全教室、交通安全教室、交通安全教室、薬物乱用防止教室を開催する。	・6月10日に交通安全教室、6月24日に薬物乱用防止教室、7月7日に携帯スマホ安全教室を開催した。			
人権・キャリア教育課	・職員研修を企画・実施し、人権意識の向上と、授業の充実を図る。	・職員を対象とした「合理的配慮」の研修を実施し、80%以上の満足度を得る。	・研修後アンケートを実施し、100%の満足度を得た。	A		・それぞれの目標は達成できたが、より充実した成果とするために、研修で得た知見と実際の指導とを結びつける点において、工夫が必要であった。合理的配慮を明記した指導案の作成を呼びかけることにより、より具体的な指導につながる手がかりとなるようにしたい。
	・合理的配慮を明記した指導案を作成し、授業を展開するよう呼びかける。	・校内で実施される公開授業または研究授業の80%以上の指導案に合理的配慮を明記している。	・実施された授業の指導案すべてに合理的配慮が明記されていた。			

重点課題	④心がつながる 思いやりと支え合いの心に満ちた人間性豊かな社会を築くため、学校と保護者、地域、関係機関・団体等が連携し、視覚障がいに関する理解の推進に努める。				
重点目標	⑫奉仕活動や環境・エネルギー活動、啓発活動をととして、地域とのつながりを深めるとともに、視覚障がいに対する理解の推進を図ります。				
	具体的な活動計画	評価指標	A		学校関係者評価 学校関係者の意見
			評価指標による達成度 及び活動計画の実施状況	総合評価 (評定)	
小学部	<ul style="list-style-type: none"> 地域の商店に「点字ブロックの日」の啓発チラシ付きのティッシュを置いてもらえるよう依頼に行く。 	<ul style="list-style-type: none"> 5店舗以上の地域の商店に依頼する。 数日後、各商店へティッシュを置いてもらったお礼に行く。 チラシ入りのティッシュを120個以上作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 11月に5店舗の地域の商店に依頼した。2月は5店舗の内、1店舗を新しい店舗に変えて依頼した。 1週間後チラシ入りティッシュを入れた箱を回収し、店長や担当の方に直接お礼を伝えた。 聴覚支援学校の一部児童とともにチラシ入りティッシュを200個作った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童の体調を考慮し、実施日は暖かい時期に計画をたてる。 教員から、「依頼したままでなく、回収に行くことで地域の人とつながりが深まり、児童のことが知ってもらえることができる。また、児童にとっても依頼からお礼まで責任を持ってできてよかった。」という意見が聞かれた。よって、依頼する店舗を適宜見直ししながら、来年度も継続して取り組みたい。
高等部普通科	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全や視覚障がいへの理解に関しての啓発パネルを作成し、城南高校の文化祭において展示する等の理解啓発活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> A1サイズの理解啓発パネルを1人1枚以上作成し、その内容について説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> どのようなパネルを作成したらよいか話し合い、1人1枚ずつパネルを作成した。「点字ブロック」「白杖歩行」「学校周辺のユニバーサルデザイン」「交通安全に関するアンケート結果」について4枚のパネルにまとめた。それらを城南高校と聴覚支援学校の文化祭で展示し、それぞれの担当生徒が、多くの人々に説明することができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 次年度も、作成したパネルを活用した理解啓発活動を実践するとともに、少人数でできる方法を検討する。

<p>高等部職業学科</p>	<p>・本校生徒が、臨床体験を通して地域住民とのふれあいの中で相互理解を深める。</p>	<p>・アンケートで75%以上の地域の方が視覚支援学校の理解が深まったと回答する。</p>	<p>・アンケートで約87%の人が視覚支援学校の理解が深まったと回答した。</p>	<p>A</p>	<p>・地域の住民は視覚支援学校があることについて理解が高まっている。6年間体育祭の時にスポーツマッサージのサービスが行われているが、町民は毎年期待している。素晴らしいサービスで感謝している。</p>	<p>・奉仕活動などは職業人として必要なスキルであると共に、啓発活動は本校として必要な活動であるため、次年度も同様に活動を行っていきたいと考える。</p>
----------------	--	---	---	----------	--	---